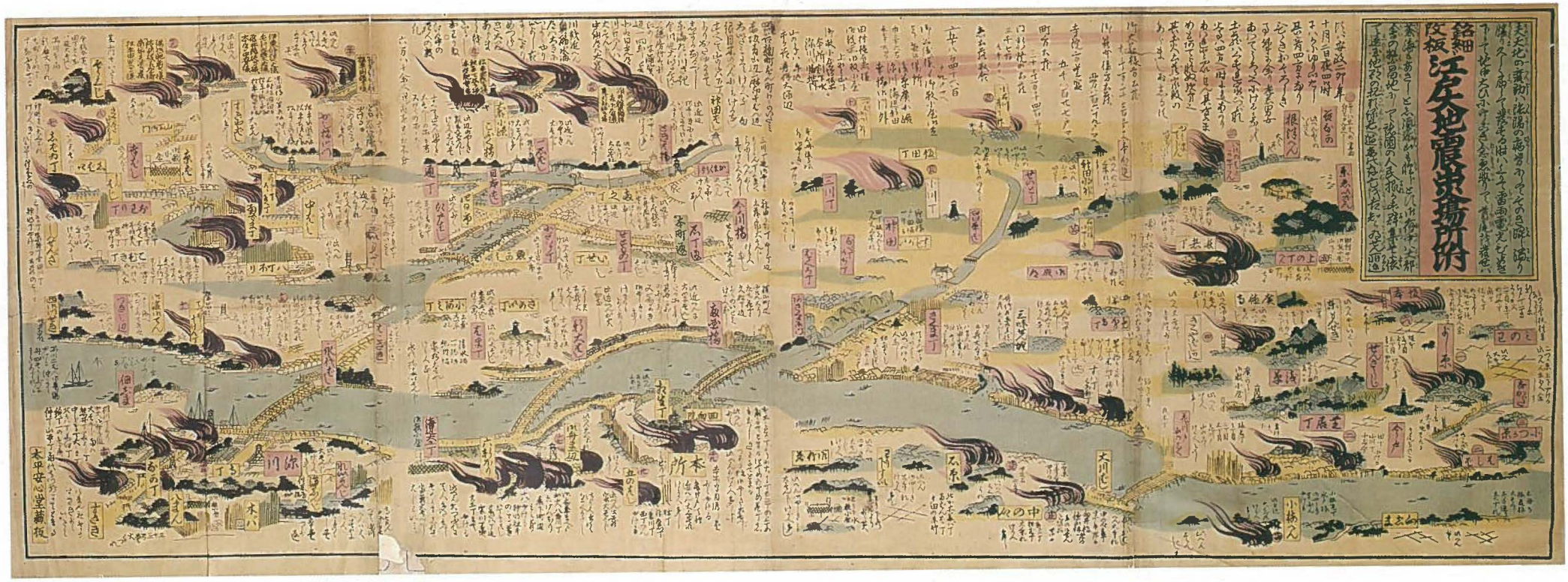

銘細改版江戸大地震出火場所附（消防博物館 所蔵）

銘細改版江戸大地震出火場所附

幕末の江戸の町を大地震が襲った。安政江戸地震と呼ばれているこの地震は、安政二年十月二日（西暦1855年11月11日）に発生した。幕府の調査によると江戸市中では、死者4,200人余、負傷者2,700人余であったという。武家の死者数は不明なので、江戸市中全体での死傷者は不明である。

地震直後には、30か所余から出火し、焼死する人も出たという。幸い広域火災には至らず、関東大震災のような大火災にはならなかった。

この地震の発生後には、かわら版が多量に出回った。かわら版とは、事件や災害などの出来事をいち早く伝えるために出版された刷り物のことである。地震の被害場所や出火場所等を絵図に記したものの他にも、鯰絵（なまずえ）などの震災後の社会を風刺した戯画も発行された。かわら版類は地震発生の約１か月後には幕府によって発行禁止になったが、その後も新しいかわら版が発行され続けたという。

今回紹介する「銘細改板　江戸大地震出火場所附」も、地震後に発行されたかわら版の一つである。江戸の東から西方向を見て描かれた鳥瞰図の形式をとっている。手前の大きな川は隅田川である。この地震では、両国橋や永代橋など隅田川に架かる橋が落ちたという史料はないが、このかわら版をみても橋が架かっているのがわかる。

このかわら版の主題でもある火災については、炎が上がっている様子が描かれ、出火場所が一目でわかるようになっている。よくみると赤丸に漢数字が書かれており、凡例によると出火場所の番付であるという。一番は、新吉原である。新吉原の遊郭では、公的な調査によると630人の死者が出たとされる。被害が大きかったことが、当時の人々も認識しており番付にも反映されている。

また、町ごとのけが人の情報や地割れなど被害の様子が詳細に文字で記載されており、被害の状況がわかるようになっている。

このかわら版では、被災した人を助けるために幕府が作った「御救い小屋」の場所も記されている。御救い小屋は家屋を失い、当面の生活手段を欠いてしまった人々を収容するものであった。

御救い小屋は、十月四日の町触れで、浅草雷門前・幸橋門外・深川海辺新田の３か所に設置されることが示された。その後、十月十二日に深川永代寺内、十三日に上野山下の２か所が加えられた。このかわら版には、追加された御救い小屋が描かれているので、十三日以降に出版されたものであることがわかる。また、このかわら版には、本所にも御救い小屋が設置されたと描かれている。他のかわら版にも本所に設置されたことが描かれているものもあるが、開設時期などは不明である。

このかわら版には「銘細改板」と書かれておりかわら版の内容が、更新されていたことがわかる。政治の中心地である江戸での事件や災害は、関心が持たれていたようで、江戸の世情を伝える情報源の一部として、かわら版類が利用された。武家層のみならず、諸国からの出稼ぎ人、店奉公人、武家奉公人も利用したと考えられる。このかわら版のなかには、「御府中ハ大都会の繁昌地にして諸国の人民招かず群集是に依て遠国他郡の親類縁者へ過京の存亡を吉知ら為せん所述」とあり、彼らは、自分の身を案ずる国元の縁者に身の安全を知らせる必要があったと考えられる。このような絵入りのかわら版は、視覚的に情報を伝えることができたと考えられる。

本来かわら版は、事実の正確性はあまり重視されない。地震被害の特徴的な部分を表しているに過ぎない、という見方もある。しかし、死者数やけが人などの数値は、誇張があるかもしれないが、出火場所や御救い小屋などの位置をわかりやすく示しており、遠国にいる者にとって重要な情報源であったことは間違いない。

村岸　純（東京大学地震研究所地震火山情報センター 特任研究員）